

2024（令和6）年10月
学校法人大東文化学園・大東文化大学外部評価委員会

2024（令和6）年度
学校法人大東文化学園・大東文化大学
外部評価報告書

目 次

外部評価委員会委員一覧	2
第一章 教育課程・学習成果（大学基準4）	3
第二章 学生の受け入れ（大学基準5）	5
第三章 学生支援（大学基準7）	10
意見交換会のまとめ	12

2024年度学校法人大東文化学園・大東文化大学外部評価委員会委員一覧

外部評価委員会任期：2023年4月1日～2026年3月（3年間）

◎…委員長、○…副委員長

2024.4

		委員名	所属	外部評価委員会 規程
1	◎	池島 政広	元亜細亜大学学長（第7代、第9代）	第3条第1号
2	○	中原 秀登	千葉大学名誉教授（法政経学部）	第3条第1号
3		天野 安喜子	花火師（鍵屋15代目宗家）	第3条第2号
4		小田 格	中央大学法学部准教授	第3条第1号
5		倉俣 徹	読売巨人軍野球振興部長	第3条第2号
6		棚橋 伸男	一般社団法人 未来教育サポート代表	第3条第4号
7		吉澤 勲	東松山市教育委員会教育長	第3条第3号

事務局：総合企画室総合企画課

※正副委員長以外は50音順です。

学校法人大東文化学園・大東文化大学外部評価委員会規程

第3条 委員会は、次の者をもって組織する。

- (1) 大学等の教育機関の教職員又は学識経験者
- (2) 経済界の有識者
- (3) 大学のキャンパスが所在する地域の有識者
- (4) 本学を卒業した者又は本学大学院を修了した者
- (5) 前各号に定める者のほか、大学に関し広くかつ高い見識を有する者

第一章 教育課程・学習成果（大学基準4）

基準4：教育課程・学習成果

選定テーマ：学部における初年次教育・高大接続に配慮した授業について

【長所・特色】

1. 高大接続に配慮した授業の取り組み

高大接続に配慮して、全学的に学生が主体的に学ぶよう初年次教育を行っているとは評価できる。高校教育において、「知識・技能」だけではなく、「思考力、判断力、表現力」、そして多様な人々と協働して主体的に学ぶ態度が重視される中、大学ではさらに発展的に、学生自ら考える能力を身につけるような教育が施される必要がある。この状況で、基礎演習などの少人数のクラスを通じて、学生が主体的に関心あるテーマを見つけ、解決に向けた資料収集や分析の仕方を学び、レポートの書き方、分かりやすく伝えるプレゼンテーションの方法などを学べるようにしていることは高く評価できる。

2. 入学前教育の取り組み

すべての学部学科にて入学前教育を実施していることは評価できる。入学前教育として、学科の特徴に合わせて課題を提示しており、多くの学科では推薦入学者を対象に、課題図書を提示し、入学予定者が主体的に考える機会を設けていることは評価できる。例えば、文学部教育学科で、推薦入試の学生に対して、教員がその課題について添削・返却、さらには一般入試の学生には、入学後の基礎演習で論議することは意義がある。このような試みは、学習習慣を身につけ、大学教育への動機付けの一助となっていると推測される。

3. 初年次教育の取り組み

各学部・学科の専門領域を踏まえて、初年次教育に積極的に取り組まれていることは評価できる。初年次教育は、学生の主体的な学びを推し進める少人数によるアクティブラーニングが基本になると思われる。その中でも学部独自の教科書を作成・活用しているケース、書道学科では、コロナ禍以前ではあるが、高大接続キャリア教育プログラムとして、高校におけるティーチングアシスト参画を実践してきていることは興味深い。このような工夫について、各学部・学科で論議して一層効果的な方法を探っていただきたい。

4. リメディアル教育の取り組み

学部・学科の教育内容に絡み、大学での学びに必要な学力水準を担保するため、丁寧にリメディアル教育を施している点は評価できる。例えば、スポーツ・健康科学部健康科学科では、高校での生物・化学について補完教育を行っている。また、この補完授業は高校の現職教員に担当してもらっており、このことも高大連携の一つと言えよう。各専門領域の勉学を進めていく上で、このリメディアル教育は大きな役割を果たしている。

【改善提言】

1. 高大連携の一層の推進

初年次教育を一層充実させるために、高大連携を進めていく必要がある。高校生の関心事、そして貴学および学部・学科の魅力を高校側に伝え、意思疎通を図っていくことである。例えば、貴学は地域との連携に積極的に取り組まれているので、そこでのフィールドで、高校生にも関心があるテーマで論議できるような場を設定していくことも考えられる。また、貴学は、グローバルな教育にも熱心であるので、海外の最近の事情について高校生にも分かりやすく情報発信するシンポジウムなどを開き、高校生ともやりとりできるような場が欲しい。

2. 社会連携を含めた高大連携

キャリアパスを一層考えるために、高大連携だけでなく、そこに社会との連携を取り込むことも必要である。つまり、高大連携と社会連携の推進である。既に、経営学部では、高大連携の取り組みとして、経営者による授業を展開されている。今後は、高校生にも将来の産業社会での活躍を見据えて、このような授業に参加してもらうことも考えられる。産業界側も、高校生や大学生という若者の思考を知ることができるため、双方にとってメリットがある。

3. 初年次教育・高大接続に配慮した授業に対する全学的な方針

各学部・学科の専門領域を踏まえながら、各々初年次教育に取り組まれている。しかしながら、専門領域が異なっても、学士課程で共通して修得すべきマインドやスキルが存在すると思われるので、初年次教育についての全学的な方針を明確にされたほうがよい。入学前教育を含め、高校側と一層の意見交換を進めて、より充実した初年次教育が望まれる。貴学の長である「大東学士力」との関係を整理することも一つのやり方である。

4. 初年次教育に対する学習成果の測定

初年次教育に対する学習の成果を測定して、可視化する必要がある。学生が主体的に関心のあるテーマを選択し、その解決に向かって情報収集・分析を行い、最終的にレポートをまとめ、分かりやすくプレゼンテーションする方法をきちんと学んでいるかを評価していくことが必要である。入学前教育についても、この初年次教育にどのように結びついているかを検証し、入学予定者に対して、より分かりやすく説明されたほうがよい。

第二章 学生の受け入れ（大学基準5）

基準5：学生の受け入れ

選定テーマ：学部における学生の受け入れ方針の内容（入学者の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像や入学希望者に求める水準等の判定方法）は志願者に理解しやすく示しているかについて

【長所・特色】

1. 学生の受け入れ方針の策定と公表

中央教育審議会大学教育部会の「三つの方針の策定及び運用に関するガイドライン」（2016年）を踏まえた全学的な基本方針に沿って、貴学では、卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）や教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）、および学力の3要素（①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③主体的に学習に取り組む態度）を踏まえて、入学者の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）を全ての学部において策定し、2017年度よりホームページ上で公表しており、この点で志願者に理解してもらう上で適切に対応していると評価できる。

2. 入学者選抜方式と求める学生の資質・能力水準

「入学者の受け入れ方針」に沿って求める学生像については、文部科学省が示している「学力の3要素」を踏まえて、教科の学習を深め、テーマを設定して探究活動を行い、卓越した学力を身につけ、あるいは学内外の活動で豊かな経験を積み、創造的な熟達を通して深い洞察を得ている、ないし人間と社会について関心を持ち、論理的・批判的に思考し、問題を解決する能力とコミュニケーション能力を持ち、さらに専門的識見を将来発揮して社会に貢献する志を持つなど大学生として持つべき広範な能力や資質を有する学生像があげられている。

この求める広範な能力や資質を有する学生像に応じて、実際の入学者選抜方法や出題内容等に反映させて入試選抜を多様に行うことが必要となる。また入学者選抜を通して、求める学生像に相応しい知識・技能が一定の水準に達しているかの評価判定を行うことが必要となる。なかでも今後、高大接続や入学前教育が展開される中で、貴学の理念や特色に応じた教育研究を円滑に推進していくためにも、その実現にふさわしい多様な資質や能力を持った「求める学生」を入学者選抜において適切に見だし、評価判定し、選抜することがますます肝要となる。

入試選抜の方式として、貴学では「一般選抜(3教科)」、「一般選抜(全学部統一)」、「一般選抜(共通テスト利用)」、「一般選抜(英語民間試験活用総合評価型)」の学力選抜型の他に、「総合型選抜(自己推薦)」、「学校推薦型選抜(公募制)」、「学校推薦型選抜(指定校)」、「学校推薦型選抜(スポーツ推薦)」、「学校推薦型選抜(大東文化大学第一高校推薦)」の非学力選抜型がある。こうした多様な選抜方式を通して、貴学で求める学生の知識・技能に加え、思考力・判断力・表現力および主体的に学習に取り組む態度の、いわゆる学力の3要素を有しているかの能力水準の評価判定が行われるシステムについては、志願者も納得しやすいものと評価できる。

入試選抜方式と求める学生の能力・資質水準の関係について具体的にみていくと、貴学では3教科、全学部統一、共通テスト利用の一般選抜方式においては、「高等学校の教育課程を幅広く修得し、入学後の修学に必要な基礎学力を有している」ことを能力評価の水準としている。英語民間試験活用総合評価型においては、「外国語の4技能の基礎的な技能を身に付けている」ことを求める学生の能力評価の水準としている。総合型選抜(自己推薦)では、自己推薦書に加えて学科によっては課題(小論文等)の提出や、グループディスカッション、個人面接などを行い、知識・技能のほかに思考力・判断力・表現力および主体的な学習態度について総合的に審査し、求める学生の能力水準の評価としている。学校推薦型選抜では、出身高校からの調査書による知識・技能を審査し、個人面接や学科によっては小論文による総合的な審査を通して求める学生の能力水準の評価としている。このように求める学生の資質・能力水準の評価に沿って、入学者受け入れ方針と入学者選抜試験の関連を絶えず適切に修正し、一覧表にまとめてホームページ上で公表している点は、外部評価委員はもとより志願者に対しても十分評価に値する。

その中で、とくに貴学の入試選抜で特徴として指摘しておきたい点は、入学前に在学中の授業料免除による経済的修学を支援する貴学独自の入学前予約採用型奨学制度「桐門の翼奨学金試験制度」を2015年に新設し、2024年度からは奨学金採用の定員100名の別枠試験と改定し、

改善させたことである。大学授業料の無償化が叫ばれる中で、まさにこうした選抜制度を導入していることは大いに意義あるものと評価できる。

【改善提言】

1. 入学定員・志願者管理

日本私立学校振興・共済事業団の「私立大学・短期大学等入学志願動向（令和5年度）」や河合塾が2021年10月に公表した調査結果によるまでもなく、18歳人口の減少をはじめ、新しい大学や学部・学科が増加し、学生ニーズが多様化している中で、とくに「定員管理の厳格化」が始まった2016年度以降、私立大学では志願者や受験者が減少し、入学定員の充足率が満たされない、いわゆる入学定員割れの傾向が強まっている。

そこで、貴学の各学部・学科の入学定員に対する入学者数比率（入学定員充足率）をみていくと、2024年度においては学部全体で1.02と定員充足率は満たされ、問題ない状況である。その中で、中国文学科の0.67、英米文学科の0.87、中国語学科の0.89、日本語学科の0.86、国際文化学科の0.88、健康科学科の0.84の6学科で定員充足率が1.00を下回っている。

定員充足の困難な状況が強まる中で、中国文学科、日本語学科、国際文化学科の3学科においては、前年度までの充足率を改善させ、その実績は定員管理の観点から大いに評価すべきことである。ただし、同一学部内の他学科が定員よりも多くの入学者を確保することによって学部全体の定員充足率を補っている現状から、今後は学科ごとの定員充足に向けての一層の努力、工夫が不可避であることは言うまでもないことである。

さらに入学定員充足の基となる入試の志願状況について、大学全体の志願者総数をここ5年間でみていくと、25,551名→24,283名→21,022名→19,190名と過去4年間連続して減少していた。しかしながら2024年度入試は、コロナ禍明けをはじめ、併願者数の増加やスポーツ科学科の定員増の事由から、出願総数で前年度より5,920名（前年度比31%の増）増加し、25,110名と大きく回復している。なかでも英米文学科の67%増を中心とした文学部での31%増、社会経済学科の74%増を中心とした経済学部での42%増、中国語学科の68%増を中心とした外国語学部での23%増、法学部での24%増、国際文化学科の52%増を中心とした国際関係学部での28%増、経営学部での35%増、看護学科での6%減がみられるもののスポーツ・健康科学部での16%増、社会学部での39%増と、全ての学部で志願者の増加がみられた。この点で、直近の減少ないし停滞ぎみの出願状況に対する貴学の危機意識から改善された出願者増の実績は、大いに評価できる。今後も、こうした出願者増加の要因を分析し、大学全体で共有し、継続して改善していくことが望まれる。

2. 定員および出願者管理策の提言

（1）情報発信・広報の検討

定員割れを防ぎ、入学志願者を安定的に確保していくためにも、基本的には入学希望者や保護者から積極的に選ばれるような貴学の機能や特徴はもとより、「スポーツの大東」、「書道の大東」といわれるような伝統に培われた強みや首都圏立地の優位性を活かした貴学の独自性や差別化戦略の強化、訴求が必要となろう。

その中で、安定的に志願者を確保するための方策の1つとして、情報発信があげられる。貴学でも、入学センターが中心となって行われている大学ホームページへの授業風景や在学生のインタビュー記事の掲載、広告動画配信など校名認知の広報が多いことから確かに校名認知度は高い効果が得られていることはブランド力調査を通して確認しているものの、その反面で貴学の特徴に対する認知度が低いことが検証されている。その検証結果を踏まえて、より印象的なキャッチコピーで大学の魅力や特徴をアピールし、受験生や志願者の心をつかむような工夫や強化が緊急の課題となろう。

とくにデジタル世代としてネットを活用する現在の入学志望者が、大学ホームページを訪れたときに、入試案内はもとより、大学の雰囲気や学部・学科の特徴および資格取得や就職先など将来の進路に係る関心ある情報に引き込まれるように外部の広報専門家の協力を踏まえて情報内容を発信する工夫が必要となろう。また貴学に対する高校生の認識手段として口コミが多いことを踏まえて、単なる大学サイドからの目線ではなく、初めて大学を訪れる高校生や受験生の目線や気持ちに沿った適切な情報内容を発信することが求められよう。

（2）入学選抜方式の検討

学部・学科の入学志願者や入学定員を安定的に確保、充足させるもう一つの重要な方策とし

て、貴学での入学者選抜方式の検討も不可欠となる。

①一般入試

まずは貴学の一般入試では、確かに入試科目の選択や組み合わせを異にする複数の選抜方法を準備し、志願者や入学者の受験ニーズへ対応していく現状は評価される。しかしながらその反面で、受験生の入試方式の選択が複雑となり、進路指導者の混乱も考えられる。また確かに受験科目を少なくすることは、受験生にとって得意科目に焦点を絞れるなど受験の負担が軽減することから志願者数の増加が期待できる。しかしながらその反面で、受験しなかった科目の基礎学力が十分に担保されず、入学後に大学の授業についていけず、その結果不登校や中退など修学意欲の減退リスクも懸念される。

したがって一般入試では、基本的に学力の3要素である「基礎的な知識及び技能」はもとより、「課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力」や「主体的に学習に取り組む態度」など総合的に評価する選抜方式のあり方について今一度検討が必要となろう。それは、同時に入学志願者の能力・意欲・適性等をより多面的かつ総合的に評価していくことの求められる高等学校学習指導要領の変更に伴う2025年度以降の新課程入試へ対応した入学者選抜方式のあり方に対する検討にも重なる。

こうした課題に対して、貴学では、既に一般選抜の独自試験および大学入学共通テスト利用入試の選抜において、「基礎的な知識及び技能」だけではなく「思考力・判断力・表現力等の能力」や「主体的に学習に取り組む態度」などを総合的に判定する仕組みを検討しており、今後その検討成果に期待したい。

②推薦入試

次いで総合選抜型や学校推薦型の推薦入試では、確かに一般選抜と比較して評価に一定の時間や労力を要するが、より丁寧で多面的かつ総合的な選抜により志願者と大学のより良いマッチングにもつながる選抜方法である。

貴学の2024年度の入試方式による入学者の割合をみると、一般入試型の学力選抜による入学者が50.7%、総合型選抜、学校推薦型選抜の非学力選抜による入学者は49.3%であった。一般的に、年内入試は非学力型入試で行い、年明け入試は学力型入試で行うと位置付けられているように、令和5年度文科省高等教育局の募集人員全体に占めるAO・推薦入試の割合についての実態調査結果によると、私立大学でのAO・推薦入試の割合が45%~50%（87大学）であり、貴学も平均的な状況にあるといえる。

とはいえ、ベネッセコーポレーション大学事業部が2011年に行った「大学生基礎力調査」によると、特に「基礎学力総合」において、一般入試とAO入試入学者の偏差値の差は10ポイント以上と、元来大学の教育内容を深く理解しやすい推薦入試・AO入試による入学者は、一般入試による入学者と比べて基礎学力が低くなっている状況がみられる。そのため、貴学では確かに調査書で提出される評定平均値で基礎学力について確認してはいるものの、大学教育の修学上の、とくに基礎学力の観点から今後学力選抜と非学力選抜のバランスについて入学選抜方式のさらなる検討が必要となろう。

なお、基礎学力を重視した学校推薦型選抜の改革として、貴学も2025年度の入試から国語と英語の2科目60分ずつマーク式のテストを実施する「公募制基礎学力テスト型」の導入を公表しており、基礎学力重視の推薦入試の改革に踏み切っており、今後その検証成果に期待したい。また貴学では、推薦入試において基礎学力を重視する姿勢は、例えば中国文学科では漢文の試験を、経営学部では情報科目の試験を課すなど、推薦入試においても既に学科ごとに必要な基礎学力に焦点を当てた独自試験による選抜を行っている。

その他、入学定員の安定確保のための推薦入試の改革として、貴学では、既に例えば総合型選抜（専願型）において、2000文字程度であった自己推薦書を、2023年度入試から1000~1200文字に変更するなど出願しやすい条件へ変更し、学校推薦型選抜においても、選抜（第一高校、指定校）の指定枠を増やす変革もみられ、今後その検証結果に期待したい。

ただし、受験生を多面的な観点から評価する推薦入試では、受験生が明確なキャリアデザインを描いて高校生活を過ごさず、入試の直前に推薦方式を選択する場合、入学後に学生の目的と大学生活との間でギャップがもたらされ、修学意欲の低減にもつながりかねない。ちなみに貴学の入試方式と修学意欲の喪失による退学理由の関係についてみていくと、いずれも推薦型入試での「修学意欲の喪失」による退学理由の割合が高くなっている調査結果がみられる。

したがって推薦入試においても、志願者それぞれのキャリアデザインに沿って高校時代まで

に様々な活動を積み重ね、しかも入学後の学修までも意識して入試準備することを志願者に是非ともアピールすることが、入学前教育のスムーズな展開と合わせて肝要となろう。

また、比較的早期に合格者を決定する推薦入試では、高大接続や入学前教育の展開に沿って高校側との連絡・協力を密に図りながら、貴学でも既に実施されている入学前に学習しておくべき具体的な内容や課題を課すなど、合格者に対して入学前からさらなる学習指導を充実させることが改善提言となろう。

最後に、大学から受験生へのメッセージとなるアドミッション・ポリシー（入学者受入れ方針）において、知識・技能の学力として「・・・を学ぶ十分な基礎学力を持っている」や、思考力・判断力・表現力の学力として「・・・の問題について論理的に考察する」といった抽象的な記述が多く、多くの学科で散見されるが、そうした記述で果たして志願者に十分に理解されるかの懸念がある。そのため、志願者に対してできるかぎり具体的かつ丁寧に表現する心がけも課題といえよう。

第三章 学生支援（大学基準7）

基準7：学生支援

選定テーマ：人間関係構築に繋がる措置として学生同士や、教員と交流を目的とした取り組み状況について

【長所・特色】

1. 学生同士や、教員との交流状況

貴学では、人間関係が良好に構築されるよう、学生同士、教員と学生との交流が積極的に行われている。社会に出てから色々な人と協働して新たな価値の創造が求められる時代では、大学の教育において、学生同士、教員と学生との活発なコミュニケーションが促進されねばならない。貴学では、オフィスアワーの公開はもちろんのこと、ゼミでも人間関係を上手く構築できるよう担当教員が努力されている。さらにはゼミ合宿などを通じて和気藹々と論議できるように雰囲気醸成されていることが推測される。

2. 学生相談室

豊かで充実した学生生活が送れるように学生相談室を設けて、丁寧に対応されている。東松山校舎では、周囲の目を気にすることなく、また、安心して相談できるよう、学生相談室を移転することで、相談者の人数が増えていることは大いに評価できる。また、問題を抱えている学生への対応について、個々の教員が抱え込み過ぎないように、学生相談室が学生支援の役割をかなり担っていると考えられる。学生の孤立化を防ぎ、良き人間関係を構築していく上で効果的な仕組みが構築されている。

3. グローバルな視点での学生支援

グローバルな視点で教育を推進される貴学では、外国人留学生の一定割合の受け入れを行い、その学生に対して日本語能力をきちんと把握して対応されている。また、為替状況などで海外への留学が厳しくなる中で、経済的支援を積極的に行っていることは評価できる。今後、産業界でもグローバルな展開が進み、海外の人々との協働の機会が増えていく状況を考えると、外国人留学生と日本人学生との一層の交流が必要となる。

【改善提言】

1. 人間関係構築に繋がる全学的な方針

各学部・学科において、人間関係構築に繋がる措置を工夫されて学生に接しているが、この措置について、全学的な基本方針を明確にしておいたほうが良い。学生同士や教員とのコミュニケーションをどのように取っていくかは大事なことである。確かに、貴学の「学生認識・行動調査」において、「交流し、助けあえる仲間は一人でもいる」としている学生は約90%と多く、「信頼できるまたは比較的気楽に話せる教職員は一人でもいる」はもう少し高まることを期待するが約64%となっていることから、それなりに交流が進んでいるが、今後は、一層、全学的な取り組みが求められる。

ただ、大学は社会で生き抜く力を醸成する場であるので、学生一人ひとりが主体的に個人の問題に向き合い、最終的に人間力と専門領域の知見を高めていければ良いと考えられる。その点において、貴学の「大東学士力」に期待するところが大きい。

2. 良き人間関係構築に繋がる教員のクラスマネジメント

学生が主体的に関心のあるテーマを取り上げて、その解決に向かって互いに協力しながら進めて、新たな解を見つけて、喜びを分かちあえるクラス運営ができれば良いと考える。このような試みを通じて良き人間関係が生まれていくと思われる。貴学では、各学部学科において、クラス編成を行い、少人数教育を実践されているが、その中で教員にはクラスマネジメントが求められる。この効果的なクラスマネジメントについては、各学部・学科はもちろんのこと、全学的に共有して活発な論議を行い、年々変化する学生のニーズに対応されることが望まれる。

3. 外国人留学生と日本人学生との一層の交流

外国人留学生同士が集まってしまうケースが大学では見受けられるが、貴学では定期的に交流の場が設けられている。また、クラス編成でも交流ができるようにしている。今後は、外国

人留学生と日本人学生が一緒になって活発に論議できる場ができると良い。例えば、地域連携を積極的に推進している貴学では、フィールドワークなどを通じて地域活性化に繋げるアイデアなどが外国人留学生からも出れば面白い。このような試みを通じて、ダイバーシティに満ちた貴学での幅広い人間関係の構築が可能となる。

4. 海外インターンシップや視察の支援

産業界では、海外で活躍できる人材が求められているため、海外留学の際にインターンシップを取り入れ、海外の人々の考え方を理解し、一緒に仕事をするという人間関係の構築の意味を学習しておくことが必要になっている。日本を離れ、遠い海外での生活を共にして、仲間同士の人間関係の構築にも繋がると考えられる。このような対応を貴学として一層取り組んでいくことが望まれる。また、ゼミなどでの海外視察への資金的な支援なども一考に値する。

5. 野球などの部活動を通じた人間関係構築のあり方

野球などプロ選手を目指す高校生に対して、部活動において活躍した卒業生の進路状況など有効な情報を発信して、魅力的な進学先であることをしっかりと学外にアピールしていく必要がある。そして、スポーツ推薦合格者の所属する学部・学科とのミスマッチが起こらないように今後も配慮していくことが望まれる。部活動も大学での良好な人間関係を構築していく上で大事である。受講生の興味のある分野とのマッチングについて、今後もきちんと検討していくことである。

以 上

意見交換会のまとめ

日時：2024(令和6)年9月18日(水) 15:00～17:00

場所：板橋校舎 2号館2階 2-0207 会議室

出席者：外部評価委員（池島政広委員長、中原秀登副委員長、天野安喜子委員、小田格委員、倉俣徹委員、棚橋伸男委員）
大学執行部（高橋進学長、河内利治副学長、青木幹喜副学長、中野紀和副学長、勝又宏副学長、村俊範学務局長）、梅沢祐行事務局長

欠席者：吉澤勲委員

第1章：基準4 教育課程・学習成果

基準4：教育・学習

選定テーマ：学部における初年次教育・高大接続に配慮した授業について

1. 学部学科が実施している初年次教育・高大接続に配慮した授業の取り組みについて。
2. 初年次教育と入学前教育の連関状況を確認し、取り組みについて。

<質問事項>

- ・カリキュラム編成などへの反映
- ・高校教員と大学教員との交流
- ・入学前教育と入学後の不適正への対処
- ・キャリアパスを考慮して、産業界などの社会との連携

1. カリキュラム編成などへの反映

<外部評価委員からの質問>

全学的な方針がどのように立っていて、各学部学科に仕組みとして備わっているのか。初年次教育、高大接続科目に関する方針があればお聞きしたい。学科において、3、4年時の教育を見据えて仕組みを教えるというものもあれば、学士の学位を持っている者としてこういったスキルを持ってほしいという状況が見て取れた。方針があれば教えてほしい。

<大学からの回答>

非常に大きなテーマである。入試選抜方法の多様化により入学者に対し学びの導入をスムーズにできるように、工夫していかなければならないことを承知している。本学では昨年、初年次教育、高大接続に関するSD研修会を開催した。高等教育たる大学の教育・授業を考えるにあたり、背景にある中等教育、高等教育の流れを理解する必要があった。その背景の説明を受けて、附設校である大東文化大学第一高校の橋本校長から高校での取り組みを共有していただいた。探究授業の展開を受けて、大学に何を求めているのかをお伺いした。また、本学入学センター堀川所長より、今後の入試の形態は、時代に即した対応が求められていることを共有した。SD研修会出席者からも好意的なコメントが多数寄せられた。また、本学では附設校である大東文化大学第一高等学校との連絡協議会を定期的に開催している。また、高大連携については、現在、本学と高大連携の覚書締結をしている高校が8校ある。実際に高大連携の成果が出てくるのはこれからであると認識している。

また、初年次教育に繋げていくにあたり、主に推薦入学者に対する入学前教育を行っており、大学合格後の学習習慣の維持と大学教育への動機づけを全学で行っている。内容については、各学科の学問領域に合わせて実施している。

学位授与に関しての方針であるディプロマポリシーをはじめ、教学の方針については3つのポリシーで示している、また、各学科では、その3つのポリシーに則ってカリキュラムマップとカリキュラムツリーを作成しており、大学教育上における初年次教育の位置を表している。その他、科目ナンバリングも含め、シラバス等に反映しており、学生も確認し、順次性・体系性がわかるように「見える化」を進めている。

2. 高校教員と大学教員との交流

<外部評価委員からの質問>

東京都内、関東圏内の高校の先生と大学関係者が交流拡大をする、もしくは研究会の開催、定期的な情報交換が行われているかお聞きしたい。

推薦入試で提出する資料が増えたのに、本当に大学は読んでいるのかという声がある。進学ガイダンスの後などでその場に就いてもらい意見交換をすることで、大学と高校教員との距離がぐっと縮まるので、大東文化のファンをさらに増やしてほしい。

<大学からの回答>

現在、高大提携の協定を結んでいる高校が8校ある。新たに埼玉県、北関東圏を中心に新たな高校とも提携を結んでいくことになっている。主たる目的としては、高校生が大学に来て学びを深めるということや、探究の授業を軸として高校の学習ニーズに合わせた連携を進めていくことによる、新たな試みを進めている。関係する教員数を増加させつつあるが、大学、高校側共に膨大な負担はかかる。そのため、高大連携のコンソーシアムを作り、関わっていくことを考えている。そして、連携、提携高校との関係を密にして、新しい形の高大連携を考えている。

本学受験者が在学している高校すべてと提携を結ぶことは難しい。そのため、課題探究プログラムを用意し、提携協定を結んでいない高校とも連携できるようなプログラムを用意している。高校の先生との研究会、情報交換会は本学主催としてはできていないが、高校からお招きがあり参加している状況である。探究の授業について、本学、高校共に詳しい先生もいるため、高校とのつながりをさらに深めて、連携を強化していきたい。

3. 入学前教育と入学後の不適正への対処

<外部評価委員からの質問>

推薦試験にシフトしているのが現在の大きな動向だが、学力差があることを鑑みると学力不足の生徒へのサポート体制を打ち出すことと、学力がある子は専門的な領域に引っ張っていく必要があると思うが、大学の対応を教えてください。

<大学からの回答>

初年次教育は大きな4つのカテゴリーがあり、補習教育、スタディスキル、スチューデントスキル、専門教育への橋渡しがあり、入試の多様化によってさまざまなレベルの学生が存在しているので、それらの学生に対する教育的な大きな課題であると認識している。この4つの観点をしっかり初年次教育に落とし込む必要がある。そのために施策を展開しているものの、それらに対する理解を深める必要がある。補習教育については大学全体としては充実しているとは言い難いが、健康科学科では、理系の学科であるため、生物、化学が重要であることから。毎週水曜日の5限に全員参加で授業を行っている。毎回課題をクリアし、クリアできない学生については、10月の半ばまで学科の専門教育で必要なレベルの化学と生物の知識を身に着けるためのサポートを行っている。

また、低学力の学生に目が行きがちであるが、本学入学者の中でも高学力であるハイエンドの学生についての対応が課題である。キャリアセンターが学生を募集し、アクティブラーニングをやりながらスタディスキル、スチューデントスキルを身に着けられるような仕組みづくりを行ない、ハイエンドの学生へのケアも行っている。

4. キャリアパスを考慮して、産業界などの社会との連携

<外部評価委員からの質問>

高校、大学、社会との連携は一気通貫と考えているが、フィールドワークも含めて高校生も関心があると考えている。そこに高校生が大学授業を受講することや、経営者を呼んで講演会を行う際にも高校生に来てもらうなど、高校生だけでなく産業界としてもいいのではないかと。取り組みや考え方についてお聞きしたい。

<大学からの回答>

本学では高大連携科目の指定が一部であるものの、高校生の学習サイクルなどとの差異から、高校生の受講者がほぼいない状況である。なお、高校生は参加していないが、大学と産業界とのつながりは意識している。特にキャリア教育は力を入れており、代表的なものとしては、授業として「インターンシッププロジェクト」を実施している。企業にご協力いただき、事前教育を行い、夏にインターンシップを実施し、最後には企業の皆様をお呼びし、学生が発表する機会を作っている。他にも学部によっては授業で企業関係者を毎回お招きして企業における実情などを語っていただく授業なども取り入れている。また、キャリアセンタ

一では「キャリアプロジェクト」を行っており、企業側からプロジェクトのテーマを出していただき、学生がグループワークを通して、学びを深めている。産学連携事業に高校生を入れるという発想については、今後の参考にさせていただく。

基準5：学生の受け入れ

選定テーマ：学部における学生の受け入れ方針の内容（入学者の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像や入学希望者に求める水準等の判定方法）は志願者に理解しやすく示しているかについて。

<質問事項>

<受け入れ方針>

- ・志願者の安定確保とそのため大学の魅力の発信
- ・入学者選抜のあり方（一般入試と推薦入試のバランスなど）

1. 志願者の安定確保とそのため大学の魅力の発信

<外部評価委員からの質問>

私立大学では定員割れが起きている大学が増えている。大学院は定員割れをしている大学が多いが、学部も増えている。大東文化大学では、定員割れを防ぐために、魅力ある情報の発信と入試選抜方式にインパクトのあるような情報発信を考えているか。また、入試制度の在り方として、奨学金試験をすでに行っているが、推薦入試の割合が高くなる流れがあるが、基礎学力の面で不安が残る学生がでてくる。そういった学生に対して、基礎学力を見ていく制度も採り入れられることから期待している。基礎学力をどういった形で担保するのかということは、入学前教育や高大接続とも関連するため、今後どのように対応されるか伺いたい。

<大学からの回答>

学校推薦型と総合選抜型入試と一般学力型入試での入学者比率は1対1の状況である。一般的には学校推薦型と総合選抜型入試人物考査型の入試である学科ごとに重要な科目の試験を課すような選抜も実施している。例えば、中国文学科では国語でも漢文科目、経営学科では情報科目、また、大学で学ぶ上で外国語は重要であることから英検準2級程度以上が出願要件になっているなど、人物考査型試験についても全く学力を問わないというわけではない。受験勉強を3年制の2月前半まで頑張った生徒とそうでない生徒では学力差が出やすいということもある。また、今年の11月から基礎学力テスト型の入試を導入する。基礎学力テスト型は英語と国語でスタートしている。数学や理科が基礎学力として要求される学科もあるので、今後、内容の見直しなども含めて、今年の実施状況を踏まえ、年内入試でもより基礎学力の担保を図っていきたいと考えている。入試が早期化すると高校生も合格後大学入学までの時間が長くなるため、授業や勉強に対するモチベーションが保つのが難しいという話を聞くため、入学前教育はしっかりやっていきたいと考えている。

受験生を増加させるには目玉になる入試制度を改革することや大学のブランド力を高める広報をするということが必要である。入学センターでは外部業者によるブランド力調査のデータを得ている。本学の校名認知は非常に高い状況である。ところが特徴については非常に認知度が低い。教育内容、就職も特徴的な点についてのアピールすることの難しさはあるため、これまで校名認知の広報が多かった。しかし、本学を志望する高校生が本学をどういったところから知ったかを分析すると口コミが多い状況である。ブランド調査で弱いところも見えてきている。強みのあるところをさらにパワーアップするという戦略がある。

基礎学力については、人物考査型試験であると小論文、課題論文系でみるのもう一つは調査書に出てくる評定平均値で確認しているのが現状である。

基準7：学生支援

選定テーマ：人間関係構築に繋がる措置として学生同士や、教員と交流を目的とした取り組み状況について。

<質問事項>

1. 人間関係構築に繋がる措置の貴学の基本方針と学部横断的な仕組み

2. 良好な人間関係を構築するための基礎演習などの工夫

<外部評価委員からの質問>

「人間関係構築に繋がる措置」とは、学生あるいは教職員とどのようにコミュニケーションを取っていくのかという点が基礎であり重要であると考えているが、全学的方針または学部横断的な仕組み、取り組みがあれば伺いたい。

また、様々な特性をもった学生との接し方について工夫を重ねられている様子が分かる。外部から見た際に、貴学においてどのような取り組みが行われているのか分かりやすくなるため、「人間関係構築に繋がる措置」に関する方針等を言語化することは、良いと思われる。なお、とある大学では学部ソーシャルワーカーを配置し対応しており、ソーシャルワーカーを基軸として担当教員に連絡をする方法を取っている。しかし教員の負担が増えたように感じる場面があるという現状である。

さらに、大学は社会で生き抜く力を養うところとして社会から期待されている。全ての学生が納得するかたちで大人がケアしてしまうと、社会に出た際に学生が困惑することがあるのではないだろうかという懸念がある。企業からすると、人間力と専門的知識が備わっている人材を求めているのであり、貴学でいえば、大東学士力としてその部分を養成されていると見受けられるため、その点に期待をするとともに、将来的に強く社会で生きていけるよう手放す部分があっても良いように感じる。社会で生き抜く力という点では、「学生認識/行動調査」にあった、「助け合える仲間がいる」という結果からみると、仲間とともに前に進むことができるという事が伺え、貴学の良い面が表れていると感じている。

<大学からの回答>

人間関係構築に繋がる方策として、授業において、初年次からクラス分けされた20人前後の授業を必修・選択必修として設定し、ディスカッションやプレゼンテーション、学生同士で行う調査活動などを通じてグループワークを行うことによって、学生同士がお互いに馴染む機会となるように各学部・学科で考慮している。また、授業欠席が続く学生に対しては、学科内の教員同士で情報交換を行い、ゼミ担当教員から学生へ逐次連絡を行い、必要に応じて学生支援センター等に伝達し、学生生活にスムーズに溶け込めるよう、学部・学科内で教員と学生がコミュニケーションをできるだけ取るよう心掛けている。しかし、このような対応は教員の負担が大きいことや大学教員と初等中等教育の教員との資質が異なる点で難しい部分もある。解決策として多くの授業科目を少人数クラス編成にするなどの案が考えられるが、クラス数が増えることから教室や教員の確保などの問題点も発生し、根本的な解決にはならないため、良い案があったらぜひご教示いただきたい。

大学としての方針においては、本学として「学生支援に関する方針」がある。しかし、人間関係構築に関する具体的な方針とは言えない。この点について、今後大学としての課題であると考えている。補足として、例年学生に対して実施している「学生認識/行動調査」アンケートにおいて、「3. 他学生および教職員との関係」の項目では「交流し、助け合えるような仲間はひとりでもいますか。」という設問に対し、全学では約90%が「いる」と回答があった。また、「信頼できる、または比較的気楽に話せる教職員はひとりでもいますか。」という設問に対し、全体では約64%が「いる」と回答があり、年次が上がるにつれて「はい」が増える傾向にある。本学としては、学生が相談する相手や気軽に話せる教職員の割合が増えることが望ましいと考えている。

問題を抱える学生への対応については、それぞれの教員が1人で対応するには膨大な資源を費やさざるを得ず、当該学生以外へ対応する時間が減ってしまうという点において大学としても教員としても大変苦勞している。このことから、教員が問題や対応について抱え込み過ぎないように、学生相談室においてよろず相談的に対応ができるよう工夫することで、現在のはかなり機能的に大学として学生支援について対応できている。また、学生同士の交流という点では、コロナ禍をきっかけに学生の6割以上が部活やサークルに所属しておらず、人間関係の構築の機会としての課外活動を強化するべく、改めて部活やサークルに参加するような風潮を作っているところである。

さらに、委員より、「大学が学生をケアし過ぎてしまい、大学が初等教育レベルの学校化してしまう傾向」についてご意見をいただき、改めて大学は教育の場であり学生の主体性を育成するという点について再認識することができた。その上での初年次教育の重要性について考えるきっかけとなった。

<大学からの質問>

学生の相談には、学生相談室、ソーシャルワーカーを利用する制度があるが、他大学において教員が相談できる組織体制についてはどのようなものがあるかご教授願いたい。

<外部評価委員からの回答>

学部レベルにおいて、ソーシャルワーカーがほぼすべての教員に学期終了ごとに連絡をしているため、そのタイミングで教員がソーシャルワーカーに相談が出来ているという現状である。学生からの相談内容について、どのように対応するか職員、専任教員、非常勤講師との間で板挟みが生まれるケース等が発生することがある。このように、大多数の学生に割くエネルギーと一部の学生に割くエネルギーのバランスが取りづらくなっていることは事実である。

3. 学生の孤立を防ぐ取り組み

<外部評価委員からの質問>

大学における人間関係の構築は、まず学習を通して行われる交流が重要であると考えます。例えば、ゼミのなかでグループをつくり学生が議論することで結果的に人間関係が構築されることに繋がることがあるが、実際に、各教員が工夫を凝らした授業運営のなかで人間関係が良くなり学生同士の交流が生まれた例、反対にうまくいかなかった例などについて、できる限りシェアしていくことが大切であると考えます。このように良い取り組み、議論の活性化につながるポイント等について情報交換や議論を行うことがあるか伺いたい。

<大学からの回答>

教員の授業運営の工夫については、学生同士の議論を活性化させる良い取り組みやポイント等について、学科単位でFDのテーマとして取り上げられることがある。例えば、FDとしての開催ではないが、社会学部では初年次教育において、当初は通年で担当していた科目を半期ごとに担当教員を変えて実施し、年度末に教員が集まって振り返りを行っている。より良い授業運営になるように課題を見つけ、改善策について話し合う機会を作っている。このような取り組みは学科ごとに差があり、今後、全学的に実施していくことは有益であると考えます。

4. 留学生と日本人学生の交流・協力（フィールドワークなどで）

<外部評価委員からの質問>

留学生がたくさん在籍している場合、留学生同士で集まってしまうというケースが見受けられるが、貴学に置いて留学生と日本人学生の交流の場として、例えばプロジェクトを組み同じテーマに取り組むなどの事例があるか伺いたい。また、そのような事例がない場合、フィールドワークや地域の活性化に留学生を交えて開催することで、お互いの文化を紹介しながら取り組むことに繋がり、面白いことが出来るのではないかと考える。

<大学からの回答>

交換留学生と日本人学生の交流の場は年に3回開催されており、それぞれ約20名程度の交換留学生と日本人学生が集まっている。また、4年間留学をしている外国人学生に対しては、交流会の場を設定してはいない。しかし、基礎演習などのクラス配置において、留学生が同じクラスに集中しないように配慮してクラス編成を行っている。

5. 野球という部活動を通じた人間関係構築のあり方（野球で進路を開拓したい高校生への有効な情報提供などを含む）

<外部評価委員からの質問>

貴学の運動部に所属する学生がプロ選手を目指す場合、どのような支援を行っているか。また、スポーツ推薦合格者の所属学部学科希望と実際の所属学部学科のミスマッチが起らないようすることで、スポーツ推薦入学を考えている高校生に魅力的な進学先として検討される機会が増えると考えます。

<大学からの回答>

本学の男子バスケットボール部では、プロチームからスカウトされる学生、または監督経

由で実業団へ紹介する学生、さらには学生本人が赴き、実業団の試験を受ける学生がいる。他にもクラブチームへの所属や、スポーツ推薦として企業に就職する学生、さらにマネージャーやトレーナーとして活躍している学生は、Bリーグチームのマネージャーとして採用される場合、スポーツジムに就職し、働きながらトレーナーの資格を取る学生など、様々なかたちで、学生個人がやりたいことを大学で発揮し、就職していく風土がある。従って、部活での本人の活躍のために周りのアシストがプロへの道を開く支援だと考えている。

また、スポーツ推薦入学者の所属学部のミスマッチが発生するという問題について、受験生に対して部活動にも力を入れながら、勉学に励むことで、教員免許を取得して教員になる道があるということを伝えて、受験生の興味がある分野を掘り起こしマッチングさせるようなシステムも検討しなければならないと感じている。

以 上